

コウノトリ湿地ネットニュースレター(15号)



コウノトリ湿地ネット
豊岡市城崎町今津1362
電話 0796-20-8560
e-mail toshima8560@iris.eonet.ne.jp
HP http://wac-s.net/

「ハチゴロウの戸島湿地祭り」を開催しました。

今年はミズアオイの姿が湿地に見当たりません。だからと言って昨年までの「ミズアオイまつり」を中止するには忍びなく、「ハチゴロウの戸島湿地まつり」として今年も開催しました。バザーもいろいろ出品して頂き、コウノトリ講座、歌の広場等楽しい一日となりました。ご来場頂き有難うございました。(表紙裏の写真をご覧ください)



湿地散策(胴長を履いて湿地に入ろう!)に果敢に挑戦される皆さん、お疲れさまでした。

目次

• 例えば、いろんな「公」が重なり合って機能するような	1
• 銅鐸に描かれた鳥はコウノトリか!?	4
• ツバメのねぐら入り	9
• 古きをたずねて新しきを知ろう	10
• ハチゴロウの戸島湿地便り	12
• 編集後記	14



例えば、いろんな「公」が重なり合って機能するような

(コウノリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

今回は、多様な「公」について、いろんな面から考えてみたい。

1. 新しい条例から

「かつてのふるさととは、家族や親戚、近所の人と一緒に稲を一株一株、収穫する風景があり、人と人がつながり合う暮らしが大切にされていました」

「わたしたちは、自らの豊かさを追い求め、自然との結びつきや人とのつながりを軽んじた結果、姿を消していく生きものがあることや、他の人々や生きものに支えられて生きていることに目を向けることができませんでした」

この9月市議会で提案され審議中の、「豊岡市いのちへの共感に満ちたまちづくり条例(案)」の前文の一節である。この反省を基に、本文第2条では「いのちのつながりを広げ、深め」「未来へ引き継いで」いくことを基本としてまちづくりを進めていくことが述べられている。つまり、この条例は「共感＝つながり」をすごく重視してつくられている。

かつての個人、家族、地域がつながり、自然・生きものとも関わり合った暮らしぶりは、意識してそうしたのではなく、社会の有り様がそうだったからだ。昭和30年代後半以降に様々なつながりを壊してしまったのも、経済最優先という社会の有り様だった。ならば、かつてのつながりを取り戻すには、社会の流れがまた変わるのを待たねばならないのだろうか。あるいは、行政の力を強大にすればいいのか、市民の自立を促せばいいのか。はたまた、新たなシステムがいるのか。

豊岡での経緯と挑戦ぶりを少し振り返ってみよう。

2. 一枚の写真から

右の写真は、昭和30年代後半の市内の風景を神戸新聞社が撮られたものだ。人工巣塔にコウノリのペアが立っていて、その下では農家の方が農薬を散布している。野生コウノリへの農薬の無使用を訴える象徴的な写真として何度も使われたので、目にした方も多いただろう。この写真を改めて見ていると、私は単に農薬云々だけでなく、いくつかの今日的な課題が読み取れると思う。

人工巣塔は行政がコウノリの保護策として建てた。農家は食糧増産という名のもとに農薬を用いて増収に勤しんだ。しかし、この両者の熱心な誠意はどちらも成就しなかった。コウノリは昭和46年に野外でいなくなってしまう、農業は昭和40年代後半から減反政策に切り替えられてしまう。なぜなのだろうか？ 乱暴だけれど、これを「公」と「個」に分けて考えてみたい。

行政(公)が天然記念物という日本の文化的・学術的に貴重なコウノリを保護するのは、公共の利益を守るためなのだから当然のことだ。問題は、保護の対象が個体だけに向けられたことだ。コウノリという種(公)の保護には、コウノリが暮らす地域(公)も一体に対象にしないと成果は得られないことは現在なら誰しも理解するが、当時はまだ生態学が浸透していなかったし、社会は経済至上主義を突っ走っていたのだから仕方がない。僅かに残っ



た特定の個体(個)を懸命に守ることで精いっぱいだった。一方の農家はコメの生産を生業としており、自作農なのだから自分の田んぼ(個)で自分なりにコメを効率的に生産し、利益を得る。行政(公)、農家(個)、それぞれが自分の「個」だけを対象にしているので、「公」の観点・接点は存在しない。これではコウナリは人里(公)で暮らせない。唯一の方法は、行政(公)がコウナリ(個)を飼育下に移して守り続けることだった。

3. 個から公への歩みは農地の団地化から始まった

平成4年から始まった環境創造型農業実証田の取り組みは、平成12年の頃には様々な方法での無・減農薬稲作の拡大となり、点在する個人水田を集約し団地化する動きに発展した。環境創造型稲作を実践する農家の田んぼを同一水系沿いにまとめようとするものだ。アイガモ農法田が団地化され、祥雲寺地区では13年から転作ビオトープ田も加わって大きなまとまりとなった。

これらの動きは、農業の方向を変えていくには個々の農家が頑張るだけでは限界が来ていることを察知され、仲間で集い、グループで行動されたものだ。コウナリの郷公園の地元地区・祥雲寺ではコウナリと共生する地域づくりの中心に環境創造型農業が据えられ、地域ぐるみの取組みとなった。圃場整備事業での換地ではなく、環境(公)への効果を求めるために個人毎の田んぼをグループや地域の農会(公)が集約するというのは、画期的だったと思う。

平成19年には「農事組合法人・河谷営農組合」が34名で設立された。いわゆる集落営農だ。河谷地区では、平成11年のコウナリの郷公園開設に関連して村づくり委員会が設置されており、「集落の農地は集落で守っていく」「農家が安心して耕作を続けられるように、その受け皿を準備しておく」という趣旨で、実質13年から営農組合として立ちあがっていた。約20haを持つ同組合の経営理念は、「コウナリ育む農法を推進し、豊かな地域、環境づくりを目指す」「農地を保全し、美しい景観をつくる」とある。農事組合という「公」が、農業と併せて地域・環境・景観という「公」を対象として活動されているのだ。先輩である「祥雲寺地区営農組合」も同趣旨、同理念だ。

このことは、行政、地域という従来の「公」に「新たな公」が加わって重層的に機能していると言えよう。

4. 小さいけれど、当会だって「公」の一つ

もちろん、数あるNPOはみんな「公」の一翼を担っている。当会もハチゴロウの戸島湿地という公共施設を管理し、休耕田という非生産農地を湿地化してコウナリに供し、不特定の子どもたちに環境教育しているので、「公」の端っこにはなれるだろう。ここで課題とするのは、NPOの立ち位置と活動をいかに持続可能にするかだ。私は、そのどちらについても行政・市民の両方との関わり方で大きく左右されると思う。一口で言えば、現場に根差しながら行政と連携して実践することが必要だ。あんな団体が、気がつけばあんなことまでやっている、というのが理想だ。(持続可能への支援策については、別の機会に・・・)

もっともっと、いろんなグループ、団体が、いろんな活動をしていけば、おのずといろんなつながりが生まれるだろう。「孤立」という文字がなくなればいいなあ。

5. 田結では、一歩先に進んでいる

田結地区で展開されている「コウナリ舞い降りる地域づくり」は、とても魅力的だ。放棄田を湛水してコウナリの餌場にされているのだが、そこでの特徴は次の点だ。

- ① 個人所有田の境界が取り去られて、放棄田全てを1つの



地域共有資源とされている。

- ② 餌場づくりが経済に直結しないことを、誰も気にしていない。
- ③ 様々な外部からの参画を拒んでいない。
- ④ そして、(口は悪いが)ともかく明るい。

この4点は、いずれもこれからの歩むべき方向に大きな示唆を与えているように思う。当会は今後も関わり続けながら、取組み状況を本誌・HPでその都度報告したい。

結局、もう「官か民か」にこだわる時代ではないだろうし、機関とか企業とか集落や団体とか、既成の組織(器)で解決できないものは、あるときは別の主体と連携し、あるいは幅広く手法を考えて、様々にやっていけばいいのではないかと。環境だって防災だって、もう待った無しなのだから。

2011 コウノトリ写真コンクールのお知らせ

コウノトリを通じて野生復帰のテーマである「自然との共生」が伝わる作品を募集しています。

- 被写対象 国内のコウノトリ
- 応募資格 プロ・アマ問わず、どなたでも
- テーマ 自由題目
- 応募期間 2012年1月13日(金)当日消印有効
- 問合せ先 コウノトリファンクラブ事務局
〒668-0025 兵庫県豊岡市幸町7-11
兵庫県但馬県民局地域政策室地域振興課内
Tel 0796-26-3674
fax 23-1476

「コウノトリ・フィールドワーク実習」参加者募集中

- 開催日時 2011年11月5日(土)14時~16時
- 集合場所 豊岡市立戸島湿地
- テーマ コウノトリが生息する湿地作り 講師 佐竹節夫(コウノトリ湿地ネット代表)
- 内容 コウノトリの生息地として整備された戸島湿地において、湿地の維持管理作業を行い、その方法を学びます。
- 参加料 無料
- 申込先 兵庫県立コウノトリの郷公園
Tel 0796-23-5666 E-mail kounotori@pref.hyogo.lg.jp
(詳しくはお問い合わせください)



1 はじめに

2011年5月、大阪府東大阪市から八尾市にかけての池島・福万寺遺跡で弥生時代前期(2400年前)の水田跡で見つかった鳥の足跡が、国内最古のコウノトリのものであると報道された。コウノトリの足跡は、(財)大阪府文化財センターが1996年に発掘調査した際に検出したもので、洪水で埋まった水田跡に人の足跡と鳥の足跡が混在した状態で確認された。(財)大阪府文化財センターは、鳥の足跡の石膏型をとり、奈良文化財研究所の松井章氏に種の鑑定を依頼、増井光子氏(兵庫県立コウノトリの郷公園、前館長)と三橋陽子氏(同公園、獣医師)や(財)山階鳥類研究所の協力を得て、コウノトリの足跡であることが判明した(松井・井上 2011)。



水田跡に残された人とコウノトリの足跡
写真提供：(財)大阪府文化財センター

この発見は、弥生時代前期に河内平野の水田において、人間とコウノトリが共生していたことを証明し、さらに、銅鐸に描かれた鳥がコウノトリではないかという説を改めて浮上させるきっかけとなった。

この報道を受け、私の勤務する但馬国府・国分寺館では、調査機関の協力を得て、同年7月に「国内最古のコウノトリの足跡」の速報展を開催することができた。

今回、「パタパタ」に投稿の機会を得たので、銅鐸に描かれた鳥がコウノトリであった可能性について、過去の研究を振り返りながら模索してみたい。

2 銅鐸とは

銅鐸は、弥生時代(紀元前5世紀～紀元3世紀頃)に日本で作られた青銅製(銅と錫の合金)の鐘で、もともとは、銅鐸の中に吊るした舌とよばれる棒状の道具で鳴らした。



桜ヶ丘4号銅鐸(国宝)
写真提供：神戸市立博物館

銅鐸は、吊下げるための部分である、鈕の形状から、大きく4つに大別されている。最も古いI式(菱環鈕式、紀元前2世紀)からII式(扁平鈕式)、III式(外縁鈕式)、IV式(突線鈕式、2～3世紀)へと変化する。それぞれの型式はさらに細分されるが、ここでは省略する。大きさは、高さが20cmに満たないものから140cmを超えるものまであり、小さなものから大きなものへと変化していく。ただ、製作時期の異なる銅鐸を同時に埋納することもあるため、長期間使用されたものもあると考えられる。中形までの銅鐸は、石を削って鑄型を作るため、同じ鑄型で作った兄弟銅鐸が存在することも知られている。

銅鐸には、墓に埋められたものがないことから、個人の所有するものではなく、集団で所有したと考えられている。弥生人の生活基盤は、稲作であることや、銅鐸に描かれた絵画からも、農耕にかかわる祭祀の道具として考えられている。

弥生時代の技術の粋を結集して作られた銅鐸であるが、弥生時代以降、使用されなくなった。

3 銅鐸の鳥の研究

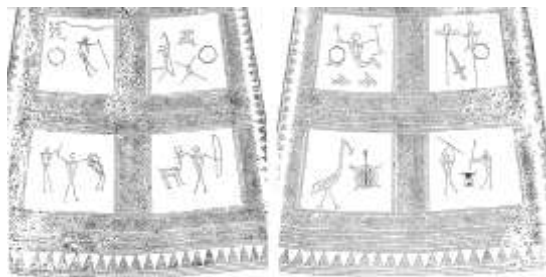
銅鐸は、今までに約500個が見つかっているが、絵を描いたものは、約60個で全体の12%にあたる。そのうち、鳥の絵を描いたのは鋳型を含め、約20点が知られている。動物の中では、シカに次いで2番目に多く、最古のI式から最も新しいIV式までの全てに姿を見せる唯一の動物である。銅鐸の鳥は、そのいずれもが長い嘴・長い頸・長い脚をもつという共通点がある。この特徴から銅鐸の鳥は、古くからツルかサギと考えられてきた。

銅鐸研究の第一人者でも知られる佐原眞氏は、論文「34のキャンパス」のなかで、「サギとみる(東 1972)か、ツルとみる(直良 1933)かに意見がわかる。私自身は特に意見なく、仮にいまサギとよんでおく」とした(佐原 1982)。また、春成秀爾氏は銅鐸の鳥について、中世以来、福島・新潟から岡山・島根までの範囲と、奄美・沖縄地方に伝わる「穂落神」(註1)の信仰が弥生時代に遡るとし、銅鐸の鳥の絵を持ち、自ら動物園で観察した結果から、井向2号銅鐸・秋篠4号銅鐸・推定島根県出土銅鐸・桜ヶ丘5号銅鐸・悪ヶ谷銅鐸の鳥は、「長い頸を真っ直ぐに伸ばしており、ツルの可能性のほうがはるかに大きい」とした(春成 1987)。しかし、1991年に根木修氏の発表した説に従い、後にサギでなければならぬと考えを改めた(春成 1992)。

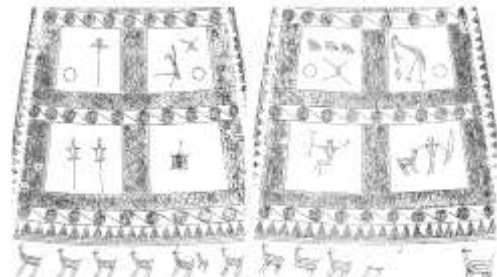
その根拠となった根木氏の説は、銅鐸に魚をくわえた鳥の姿を描いたものがあることから、魚は産卵期に水田に遡上してきたコイかフナで、魚をくわえた鳥は夏鳥でなくてはならないとした。その上で、「銅鐸に描かれた長頸長脚鳥は、かつてツルと誤認されたコウノリあるいはシラサギ類のいずれかであった可能性は非常に高い確率で予想される」とした(根木 1991)。

その後、国立歴史民俗博物館等で開催された展覧会「銅鐸の美」の図録『銅鐸の美』では、根木説の評価をしながらも、銅鐸の鳥はサギとしている(歴博 1995)。

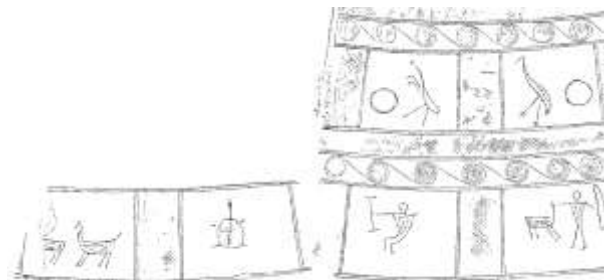
考古学研究者であり鳥見人(バードウォッチャー)の賀来孝代氏は、「魚をくわえた鳥は冬にしか目にする事のないツルは、似つかわしくなく、季節と食性からいって、サギかコウノリ」とした。また、銅鐸の絵の鳥にはツルもサギもいるとしたうえで、「銅鐸の絵は田んぼでの姿を描いたことになります。銅鐸の鳥は田んぼに立つ鳥なのです。」とした(賀来 1997)。



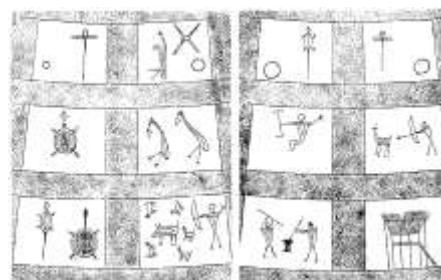
桜ヶ丘5号銅鐸



桜ヶ丘4号銅鐸



谷文晁旧蔵銅鐸



伝香川県出土銅鐸

連作4銅鐸の拓影(『銅鐸の美術』より)

根木、賀来両氏の説は、従来銅鐸の鳥の形状から論じられてきた「ツル」、「サギ」説から、鳥の生態や習性を踏まえた研究として評価される。




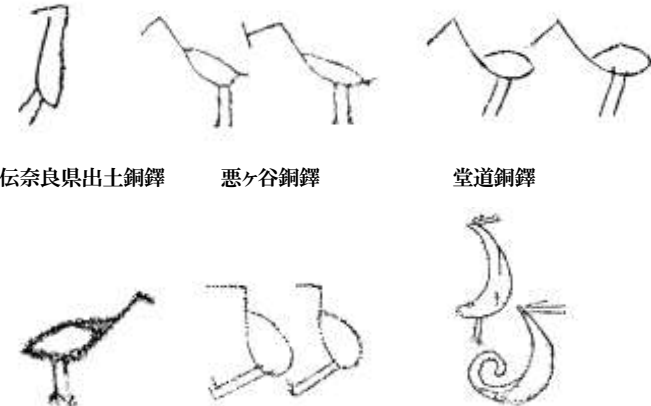
賀来氏の論文と相前後して発刊された、歴博フォーラム『銅鐸の絵を読み解く』では、佐原氏と春成氏の対談が掲載されている。佐原氏は、賀来氏が銅鐸の絵でサギだとしている鳥がコウノトリを含む可能性はないかと指摘したことに対し、「今では見られなくなってしまった鳥たちも視野に入れて考えなければいけないことを痛感しています。」と述べている(佐原 1997)。

銅鐸の鳥については、このような研究経過で現在に至っているが、サギ説が根強い状況である。

4 銅鐸の鳥

銅鐸の鳥の変遷を型式ごとに見比べ、どのように変わっていったかをみることにしたい。

古い段階のⅠ式とⅡ式の鳥は、姿全体を鋳型に彫っているため、鋳上った鳥は全体が浮き出ている。そ

<p>Ⅰ式 (菱環鈕式)</p>	 <p>井向2号銅鐸</p>
<p>Ⅱ式 (外縁鈕式)</p>	 <p>秋篠4号銅鐸 安永田鋳型 推定島根県出土銅鐸 伝鳥取県出土銅鐸 伝上足守銅鐸</p>
<p>Ⅲ式 (扁平鈕式)</p>	 <p>桜ヶ丘5号銅鐸 桜ヶ丘4号銅鐸 谷文晁旧蔵銅鐸 伝香川県出土銅鐸</p>
<p>Ⅳ式 (突線鈕式)</p>	 <p>伝奈良県出土銅鐸 悪ヶ谷銅鐸 堂道銅鐸 永田銅鐸 敷地銅鐸 大岩山Ⅰ-2号銅鐸</p>

れに対し、Ⅲ式やⅣ式では、輪郭を線で描写するようになり、表現方法に変化がみられる。鳥の特徴でいえば、Ⅱ式の秋篠4号銅鐸、推定島根県出土銅鐸、伝上足守銅鐸、伝鳥取県出土銅鐸は頭部を丸く描き、サギよりもツルやコウノトリにより近い特徴をもつ。

Ⅲ式では、桜ヶ丘5号銅鐸、同4号銅鐸、谷文晁旧蔵銅鐸、伝香川県出土銅鐸の4銅鐸がしられる。この4銅鐸には、鳥だけでなく、魚とりをする人(註2)やシカを捕らえる人、カマキリ、クモ、スッポン、トンボや、表現方法に共通点がみられる。佐原氏は「34のキャンパス」のなかで、過去の研究も踏まえ、4銅鐸が同一工房で、時を接して作った「連作銅鐸」であるとした。そして、それぞれの銅鐸の絵の詳細な検討をし、鋳造の順を、桜ヶ丘5号銅鐸、同4号銅鐸、谷文晁旧蔵銅鐸、伝香川県出土銅鐸と考えた。5号銅鐸と4号銅鐸の

銅鐸の鳥の変遷

鳥の絵は、どちらも丁寧に描かれているが、5号銅鐸のほうがより安定感があり、他の2銅鐸はかなり省略されたものとなっている。

IV式の段階になると、鳥はさらに簡略化され、頭部を描かずに嘴と頸を屈曲した直線で表現するものが多い。敷地銅鐸については、頸が嘴より短くなり、体も卵型を呈している。大岩山I-2号銅鐸は、裾部に2羽の鳥を描いている。一見、鳥とは判別しがたいが、画を反時計方向に90度回転させると、2羽の鳥が上半身をのけぞらせ、嘴を開けている姿であることがわかる。この絵は、ツルの鳴いている姿とされているが、コウノトリのクラッタリングにも見える。



(写真提供：コウノトリ湿地ネット)

5 稲作の開始がもたらしたもの

今まで研究から述べてきたように、銅鐸の鳥はツル科の鳥か、コウノトリ目コウノトリ科あるいはコウノトリ目サギ科の鳥であることに大方の意見が一致するところである。

根木氏と賀来氏は、コウノトリの可能性を示唆しているが、その後、コウノトリであった可能性については誰もふれられていない。

これは、1971年に国内の野生コウノトリが絶滅したことにより、その生態や習性があまり知られることなく研究対象から外れ、またツルと誤認されてきたことも原因としてあるかもしれない。しかし、コウノトリの生息は弥生時代以前の縄文時代から知られている。福島県の薄磯貝塚、大畑貝塚、三貫地貝塚、千葉県祇園貝塚、埼玉県真福寺貝塚からは、コウノトリの骨が出土しており、日本に飛来していたことは確かである。縄文時代は、温暖化による海進(縄文海進)により海水面が現在よりも5~6m高かったことが知られているが、縄文時代の後・晩期から弥生時代にかけて海退が進み、湿地を形成するようになる。池島・福万寺遺跡のある河内平野では、発掘調査が進み、その成果から縄文時代後期から古墳時代前期にかけての古地理・古景観の復元が進んでいる。松田順一郎氏によると、縄文海進によって現在の河内平野に海が入り込んだ「河内湾」から、その後の海退と河川の堆積作用により「河内潟」そして、「河内湖」へと変化している(松田2008)。こうした環境の変化は、コウノトリやサギにとって餌場が確保できることにつながり、さらに稲作のための水田開発は、人がコウノトリやサギにとってよりよい環境を整備することになったといえるだろう。稲作の開始は、コウノトリが留鳥となり、国内で生息・繁殖した可能性を考えさせる。日本の気候なら、環境を整えば、野生のコウノトリが留鳥として生息することは、2002年8月5日に飛来したハチゴロウが長年にわたって国内で生息したことからも十分考えられるだろう。

池島・福万寺遺跡でのコウノトリの足跡発見は、ツルの生息地や飛来場所を考えると、少なくとも、近畿地方においては、ツルよりもコウノトリの方が弥生人の目に止まった可能性は高いと考えるのが自然である。

現在、野外で暮らしているコウノトリは、野生のコウノトリを含め、46羽である。田植え前には、木の枝やワラ・草をくわえて営巣し、産卵、孵化し、夏には幼鳥が巣立っている。一年中、水田や湿地で魚や両生類、爬虫類、昆虫などを捕って食べている姿を目にする。特に、米の収穫期、黄金色に染まった稲穂から顔を出す姿は鳥の中では一際目立つ。

銅鐸の鳥の種を特定することは難しい。しかし、コウノトリと断定することはできないまでも、コウノトリとツルは、形は良く似ているが、生態が大きく異なる。安易にツルとすることは、その時代



(写真提供：コウノトリ湿地ネット)

の環境を間違ったものにする。

先日、但馬国府・国分寺館で兵庫県立コウノリの郷公園と当館が共催で「臨時鶴見カフェ」を開催した。そのなかで、桜ヶ丘5号銅鐸と4号銅鐸の鳥の絵を比較し、次の意見が出された。5号銅鐸の鳥は、頸がまっすぐに伸び、背中が直線的に緩やかに下がるのに対し、4号銅鐸の鳥は、背中の中央部が円く膨れて尾の方に下がる。鳥の研究者によると、前者はコウノリの可能性があり、後者はサギの特徴を持つという。両方の銅鐸は、少なくとも同一集団によって短期間のうちに造られたものと考えられ、描かれた鳥も同じ種と考えてよい。それでも、わずかな鑄型の線刻によって、違う種に見える危険性をもっている。

コウノリはサギほど警戒心が強くない。弥生時代の池島・福万寺遺跡の人とコウノリの足跡を見ていると、少し前の写真であるが、川のなかで数羽のコウノリと、人や牛と一緒に写っている情景と重なり合う。長年続いてきたツル・サギ論争に、コウノリも参加させるべきであろう。

6 おわりに

銅鐸に描かれている絵を解釈するのに、研究者も素人も、大人も子どもも関係はない。小稿を機会に、2000年前の名画を見ていただき、弥生人が、何を願ってこれらの絵を描いたのか、想いを馳せていただければ幸いである。弥生人の願いは、きっと私たちの願いに通じるものがあると思う。

豊岡市は、コウノリの野生復帰を通して生物多様性のまちづくりを進めている。池島・福万寺遺跡で確認された人とコウノリの関係や、桜ヶ丘4号、5号銅鐸に代表される絵画の背景にあるものは、まさに豊岡市が目指す生物多様性の原風景といえよう。

小稿をまとめるにあたり、ご協力いただいた(財)大阪府文化財センター、神戸市立博物館、野洲市教育委員会、コウノリ湿地ネットの方々に深くお礼申し上げます。

【註】

- 1 穂落神は、福島・新潟から岡山・島根までの範囲と、とんで奄美・沖縄にあった信仰。ツルが口にくわえてきた稲穂を村の上で落とし、それを人が拾って田にまいたところ、米がとれるようになったという稲作の起源神話。
- 2 桜ヶ丘5号銅鐸の絵は、柁(かせ)を左手に持ち、手釣りで魚を釣っている姿と考える。手釣りの利点は、竿釣りに比べ、水深に関係なく仕掛けを下ろすことができ、また、遠方に投げ入れることも可能である。

【文献目録】

- 松井章・井上智博 2011「池島・福万寺遺跡検出のコウノリの足跡について」
 東正雄 1972「神戸市桜ヶ丘出土銅鐸の動物像の解説」『神戸市桜ヶ丘銅鐸銅戈調査報告書』
 直良信夫 1933「銅鐸の動物画」『考古学』第4巻第4号
 佐原眞 1982「34のキャンパス」— 連作4銅鐸の絵画の「文法」— 『考古学論考』平凡社
 春成秀爾 1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館報告』12
 根木修 1991「銅鐸絵画に登場する長頸・長脚鳥」『考古学研究』第38巻第3号
 賀来孝代 1997「銅鐸の鳥」— ツルもいるし、サギもいる— 『考古学研究』第44巻第1号
 松田順一郎 2008「発掘現場の地球科学(4) 景観復元のために」『考古学研究』第54巻第1号

但馬国府・国分寺館 : <http://www.city.toyooka.lg.jp/kokubunjikan/>



ツバメのねぐら

(湿地ネット会員《但馬野鳥の会会長》 早川貞夫)

4月の初め、南の国から渡って来たツバメを見ると、春の到来を実感します。渡って来たツバメたちは、早速子育てをします。巣立った若鳥達は、巣を離れてヨシ原に大集団をつくって集まり、ヨシの穂や葉に止まって眠ります。そして朝日の出る10分前頃には飛び立って餌を探しに行くのです。やがて子育てを終えた親鳥たちも一緒に集まり、秋の渡りが始まるまで毎晩ほとんど同じヨシ原をねぐらに利用します。このように集まって眠るための大群を「集団ねぐら」と言います。



この「集団ねぐら」が毎年円山川下流河川敷のどこかに出来ます。今年は玄武洞南約1kmの、赤石水門付近にあり、約2万羽位は集まっています。(但馬全域から毎日集まってきているとのこと)



撮影 須川恒さん (琵琶湖にて)

うす暗くなる少し前からどこからともなく、何百、何千のツバメの群れがあちこちから集まって、夕焼けの空をバックに上空を乱舞し、集団でうねるように飛び交って夕空を埋め尽くします。また、別の群れは川面やヨシ原の上をすべる様に上流に向かい、下流に流れて飛び交い、うす暗くなるとパラパラとヨシの葉に止まります。

上空の群れもうす暗くなると雨が降り落ちる様にヨシに止まります。あとからあとから集まってくる群れで、上空のにぎやかさはしばらく続きますが、暗くなると全ての群れは降りて静かになり、空にはコウモリが飛び、草むらではマツムシの声が聞こえ、ツバメたちは全て眠りに入ります。



案内する早川さん

8月21日、「ラム歩き」に参加された皆さんと、ねぐら入りを見ました。その日は残念ながら雲が厚く、黒い雲に隠れてツバメは見えずらく、4、5千羽くらいしか見えませんでした。それでも数百羽の群れが次から次へと舞い飛ぶ姿に、皆さんは、おーとか、うわーとか、歓声をあげて素晴らしい光景を楽しんでいました。



ツバメを待つ

ここ円山川下流域は、野鳥にとって春秋の渡りの中継地として、また夏は繁殖地、冬は越冬地として百種以上が利用している大変重要な地であり、大切にしたいものです。



曇り空のため必ずしもしっかりねぐら入りを見たわけではなかったけど、ツバメたちが暗い空を旋回し、堤防の上で見ている私たちを掠める様に急降下し、ヨシ原に突っ込んでいく様は素晴らしく、自然の観察の楽しさを知りました。ツバメたちの動きはテレビで見るイワシの大群を空で見ているような感じ。なぜ、豊岡のヨシ原なの？但馬全域から集まってくるの？そのわけを知りたいなります。

(コウトリフロンティア)

(曇天のため、ねぐら入りの写真が撮れず、琵琶湖の方から提供頂きました 編集部)



昭和30年に発足した「コウノトリ保護協賛会」は、行政主導によって正式な活動団体立ち上げという所期の目的を達成して、昭和33年に「但馬コウノトリ保存会」と改称して生まれ変わる。阪本知事が名誉会長、佐川豊岡市長を会長とする大がかりな官民一体の組織である。ただし、強固な組織のように見えて、コウノトリ保護の実動部隊は(今も同じだが)少数だ。必然、カリスマ的人物に頼らざるを得ない。それが、前号で触れた北但農林事務所長・松本利明氏だった。

松本氏は、保護協賛会発足時から事務局長として実務全般を指導されていたので、やがて活動全般が名実ともに同氏を中心に展開されるようになる。兵庫県を退職され、昭和38年に豊岡市助役に就任されると、保存会実務も属人的に豊岡市に移管された。そのとき、秘書課職員だったのが友田英彌氏だった。以来、氏は保存会総務部長として最前線に立ち、滅びゆく豊岡のコウノトリを最後まで死守する陣頭指揮を行われた。

以下は、パタパタ編集部3人で友田邸を訪れた7月5日インタビューの続編である。

保存会の仕事は来たんだが、人は付いてこなかった

「松本さんが市の助役になられたのだから(保存会事務局も)市が持たねばならないだろうと、上層部は判断したのだろう。だけど、保存会の仕事は来たんだが、人は付いてこなかった。だから、秘書課の私がすることになった」

そんな体制で、よくあれだけのことができましたね。

「あの鳥は素晴らしいわ。またとないきれいさだ。最近、自宅の周辺にも飛んでくることがあるが、やっぱり素晴らしい！」コウノトリの魅力が、自分を突き動かしたのだと言われる。

「それと、天の声の至上命令だと思ったね。『守らねば』という使命感と言ったらいいのかなあ。松島興治郎さんも同じだと思う」

「仕事外でもコウノトリのことをやっていた。勤務時間が終わった5時以降も、しょっちゅう小山幸夫さん(当時市職員・獣医師)と一緒に野上(コウノトリ飼育場)に行っていた。夜、飼育場の餌養殖場にゴイサギがたくさん来て困ったこともあった」

当時の様子を、昨日の出来事のようにリアルに話される。

「ともかく、剥製にするのが間に合わないくらい、どんどん死んでいった」

「コウノトリを人工飼育に切り替えるとき、文化庁は『もし、地元でできないなら東京でやる』と言ったんだ。タンチョウやアメリカシロヅルの人工飼育の先例もあったので、『地元でやらねば』ということを訴えて、豊岡でやることに踏み切った。地元の人には、将来は野に帰すことを目的にすると説明したら、わりかたスムーズにいったのを覚えている」

「飼育場を建設する場所の選定は、地元で①日照時間、②水の確保、③用地取得の可能性、④周辺地が開発されないこと、などを基準に5か所候補地を挙げ、山階芳麿博士に最終決定してもらった」

こうして、昭和39年、市内野上地区にコウノトリ飼育場(現保護増殖センター)が建設され、翌年2月に福田地区で捕獲された最初の1つがい飼育下に移された。

「コウノリは淋しげにする鳥だ」

奥から小冊子を持って来られ、昭和40年前後に高井信雄氏が撮影された写真を指さされた。それは、田んぼと思われる平野に雪が深く積もっていて、その上に1羽のコウノリが立ちすくみ、口を開けているものだった。(右の写真)

「私は、この写真が一番気になっているんです。こんな雪の中で、餌生物なんているわけがない。今も同じだ。冬の餌をどうするかが、一番の心配事だ。普段でもコウノリは淋しげにするものだから、もう気になって仕方がない」

氏の心情はとてもよく分かる。昔も今も、程度の差こそあれコウノリに携わる者で、冬のコウノリの様子・仕草を見ながら気にならない者はいないだろう。それにしても、「淋しげにする鳥」とはまさに言い得て妙だ。



東浦水路、葦の傍で

左の写真は平成21年1月に花谷英一氏が撮影されたものだ。この写真もまた同じように、見る者をして「気になって仕方がない」ようにさせる力がある。今冬には実質餓死した個体も出たし、冬対策は喫緊の課題だ。

「人間の縄張りを作ったらだめだ」

最後に、後塵を拝する私たちへの発言。

「私は、昭和46年に野生コウノリ『武生』を武生市(現越前市)から連れてきたが、向こうの方には大変申し訳なかったと思っている。現在、豊岡で個体が増えたので、その恩返しに個体を越前市に帰すべきだと、知事にずっと訴えてきた。『豊岡の鳥なのだから、なぜ、遠くに持っていくのか』との声があるかもしれないが、視野を大きく持って考えないといけない」「人間ではなく、あくまで鳥中心に考えるべきだ」

友田氏の「コウノリへの愛情」と「人間の義」、そして「コウノリ保護運動の根っこ」を教えていただいたひとときだった。

いつまでもお元気で、野生復帰の取り組みにおかしな点があれば、濁を入れてください。

友田英彌氏





ハチゴロウの戸島湿地便り

8月～9月編

『ハチゴロウの戸島湿地まつり』を開催しました。

2009年7月、淡水湿地にミズアオイの花が咲きはじめ、8月にはたくさんの花が咲き、大勢の方に見ていただきたいと、『ミズアオイまつり』を開催しました。昨年には、猛暑のなかでも健気に花を咲かせていましたが、どうしたことか今年は一輪の花も見つけることができませんでした。今年のまつりは・・・と話し合ったところ、花はなくても毎年この季節には『まつり』をして大勢の方にお越しいただきたいと、『ハチゴロウの戸島湿地まつり』と名前を変えて開催することにしました。



やっと見つけたミズアオイ

まつりでは、『湿地歩き』を計画し胴長をはいて湿地を散策し、ミズアオイの花が一輪静かに咲いているのを見ていただくこともできました。管理棟内では、『鶴見カフェ』で学び、『うたのひろば』で楽しみ、恒例になった戸島地区の『たこ焼き』など、協賛くださった皆さまのおかげで、まつりを盛り上げていただきました。



胴長で湿地に入ろう！

『ハチゴロウ弁当』(有限会社 晁 コウトリツーリズム企画)

は完売となり、販売予定の時間を待っていただいていた方や、わざわざ買いに来てくださった方には、まことに申し訳ないこととなり反省しています。



ハチゴロウ弁当

『コウトリ育むお米』や『コウトリの舞』の野菜など地元の食材を使った『ハチゴロウ弁当』は、生きものにやさしいお弁当で、売り上げの一部をハチゴロウの戸島湿地の環境協力金にいただきます。また、湿地を眺めながらゆっくりお弁当を食べて、コウトリの観察やコウトリ談義をする機会も作っていかうと思っています。

(お弁当は2日前までに予約をお願い致します)

管理棟を拠点として、『コウトリ(豊岡の)ツーリズム』を進めています。

今春から管理棟の事務所を拠点に、『湿地を中心とした生物多様性保全支援事業(緊急雇用就業機会創出事業)』の一環として『コウトリツーリズム』を進めています。管理棟の仕事や、当会の事務をしながらでも関わられることを探して、担当者の吉元さん(有限会社 晁)のお手伝いをしているうちに、コウトリツーリズムへの夢が膨らんでいきました。

私の考えるコウトリツーリズムのイメージは、

♪ あなたのよう人がいるから 生まれた場所を愛しく思え

あなたのような人に逢えると 生きていることが素晴らしい♪ =小椋 佳=

この歌のような感動や、培われた譲りを教わり、伝えていく機会をつくっていき、豊岡に暮らす私たちがこのまちをもっと好きになることです。皆さんは、出逢ったひとのなかで、暮らし方や生きざまにふれて、自分まで生き生きとしてきた経験はありませんか？私が出逢った人、その感動を伝えていくことは出来ないだろうか・・・と思いをめぐらすと、すぐさま数名の人の顔が浮かびました。まず初めは、命の源である食へのこだわりを大切にされ、食文化を守っておられる方をお願いして、料理の手ほどきを受けながら会話を楽しむ会を企画しました。

7月2日と9月10日に開いた『山本千里さんのお魚いちばん料理教室』の講師の山本さんは、現在81歳で、家業を支え家事に勤しみ「人に喜んでもらうのが生きがいにつながる」と話されます。「笑顔がいちばん」と話される山本さんが作られるおはぎを食べると・・・思わず顔がほころびます。そんな感動を多くの方と共有し、考え方や感じ方にふれながら、山本さんの手しおにかけた魚料理の手ほどきを教わりたいと企画しました。



山本千里さんのお魚いちばん料理教室の風景



初回のじゃこの佃煮は好評で、参加された男性の方が夏休みに公民館の子供料理教室で広めていただいたことや、若いお母さんが「魚料理はめんどうでいやだと思っていたけど、実際にやってみると意外と簡単だった」など、魚料理に親しみきっかけになったこと。また、新聞に記載されると、山本さんのところへ新聞記事の切抜きが山のように届き、同世代のお友達からたくさん電話があったそうです。「私たちも、元気をもらったわ」と言われていたと聞き、感動を共有して多くの方との繋がりが生まれたことへの嬉し

さがこみ上げてきました。次回(11月26日)も楽しみに待ってくださっている方が大勢いて、山本さんのファンが広がっていくことは、地域の力も広まっています。

年内には、一日一人 400 グラム(青菜 60 グラム・芋 50 グラムを含む)を目安に美味しく食べるための『コウノリの舞、My、毎日、野菜料理教室』を豊岡友の会(婦人之友の愛読者会)のメンバーを講師に迎えて行います。美味しいものを楽しく食べると・・・思わず笑みがこぼれます。コウノリのまちで「継続は力なり」とみんなの笑顔が広がるような企画を吉元さんのもとで続けていきたいと思っています。

コウノリツーリズムは、「心から心へ」がテーマで、収益は必ず地元へ還元され、コウノリ野生復帰につながることを大前提としていきます。皆さん、応援してください。

(戸島湿地管理棟 森 薫)

巣立ちした戸島幼鳥



 コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

<新規入会>

個人会員

豊岡市

沖野芳郎

(2011年7月28日～2011年9月30日)

ありがとうございました。これからもよろしくお願ひいたします。

 思うこと

(コウノトリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

「あれえ、こんなに感じたかなあ」

昨年まではそう意識していなかったのに、田んぼ一面に実った稲穂の黄金色を、やたらきれいに感じます。横の道路の車中から逆光を浴びて燦然と輝く様に出会うと、思わず停車して見惚れ、刈られてしまうのが惜しくなるほどです。

そういえば、近年は5月の新緑もとてもきれいに感じるようになりました。若い頃は、淡い黄緑がなんか「しゃんとせい！」と言いたくなるようで、はっきりした緑色になった葉の方が好きでした。う～ん、肉より魚の方がよくなったし。。

単に、普通に年をとったということでしょうけど。

「編集後記」

「『手しおにかける』という言葉には料理でも我子でも心をつくし、手をつくして愛するという意味が込められています。心を手足に添わせ、自己を励ましつつ生きる人の姿を、日本の暮しのうちに、ありありと重ねて表現した、地に足のついた言葉だと思います」と、料理研究家の辰巳芳子さんは述べられています。「手しおにかける」大切にしたい言葉です。 (森 薫)

この9月に大きな台風が2度も来た。但馬地方は台風が少ないところと思っていたのだが、最近はそうでもないよう。。。台風の翌日、用事があって出かけたが、あちらもこちらはまだ水没していて、通行止め。台風一過、ではなく、台風の余波で翻弄されました。目的地まで、あっちへ行ったり、こっちへ戻ったり。でも百合地のヒナ1羽は、あの風雨の最中、巣立ちしました。風に飛ばされたのかも、という声もちらほら。

(宮村)



掘って土をあげ



踏んで踏んで



畦の完成

くくい湿地に新たに湿地
10と11を作りました